

【目的】住宅居間における視環境構成要素として、壁面内装材を取り上げ、材質、粗さ、光沢といった表面のテクスチャーが雰囲気評価に及ぼす影響を、実験的に検討する。

【方法】試料として、試験片による同様の実験の結果をもとに11種類の内装材を選定した。天然の色彩を有するもの以外は無彩色である。これらの試料を、居間の実物大模型に装備し、室内雰囲気についてSD法による評定実験を行う。4試料を用いた予備実験において、被験者の視野内の全壁面に呈示した場合と、正面の壁面(3600mm×2400mmH)に呈示した場合とで差がみられなかったため、正面の壁面に呈示し実験を行った。照明条件は、昼白色と電球色の光源色とし、650lx、200lx、65lxの3段階の照度を設定した。

【結果】被験者の平均SD得点をもとに、評定項目の因子分析を行った結果、居心地の良さを表す第1因子、空間の立体感や深みを表す第2因子、質感を表す第3因子、華やかさを表す第4因子が析出され、順に価値因子、力量感因子、質感因子、モダンさ因子と意味づけた。価値因子に得点が高い内装材は布質、プリント合板(シオジ)、石目であり、力量感因子にはプリント合板(チーク)、コルク、石目、質感因子には織物、モダンさ因子にはビニル質の得点が高い。これらの影響の要因を探るため、数量化理論第I類による分析を行ったところ、価値因子には材質と粗さ、力量感因子には粗さと光沢、質感因子には材質、モダンさ因子には材質と照度の影響が強いことがわかった。木質か布質のやや粗い内装材で居心地の良い雰囲気となり、粗めの光沢の少ない内装材で深みのある、布質で柔かいイメージとなる。ビニル質の内装材で高照度の室内では華やかな雰囲気となる。